

## 第2回 元県古川農業試験場長

佐々木 武彦 さん＝1954年度卒

# 戦後体験、コメ改良の道に

宮城県古川農業試験場の元場長、佐々木武彦さん（82）＝1954年度卒＝は銘柄米「ひとめぼれ」などの生みの親です。米の多くは、宮城県古川高のある大崎市から東北各地に広まったのです。佐々木さんが古高で学んだ時代は「戦後」が色濃く残っていました。



古高に入ると、まだ軍服で教壇に立つ先生がいました。戦後間もない時代です。名物先生もいっぱいいました。十何年も二十何年もいる先生が多く、漢文の桜田（鴻英＝42～57年在勤）先生をはじめ、それぞれの考え方をもって世の中の見方を教えてくれました。中学までは教科書の字面ばかり追うような勉強でしたが、高校ではいろいろなことを考える機会を与えられたと思います。

部活は「生物班」にちょっと首を突っ込んだだけでした。スポーツは苦手でしたが、同級生にはいろいろ活躍する選手がいて、野球では投手の伊藤（春男）君が卒業してプロに入りました。クラスでも体格がずばぬけていて、背が高く、投げる球もかなりスピードがありました。宮城球場（現・楽天生命パーク宮城、仙台市）にも応援に行き、（野球部が）甲子園に行けたらな、という思いでした。

卒業後は東北大農学部に進学しました。のんびりした時代で、受験を意識したのは3年

も夏休みを過ぎてからじゃないですかねえ。何をやるかという時、農家で育った体験が決定的でした。米作りの農家でありながら、ご飯をまともに食べられなかったという強烈な体験です。

記憶では46年5月のことです。農家は何人家族でも米1斗（15キロ）を残して後は全部、国に強制的に供出させられました。6月に麦やジャガイモが収穫でき、農家はなんとか生きながらえたのです。我々は粗末なものでも小学校に弁当を持って行って食べられましたが、東京あたりから疎開してきた子どものほとんどが弁当を持って来なかった。教室の中でじーっと座っている子の前で弁当を食べるのは子どもながらも嫌な感じというか申し訳ないっていう気持ちになりました。

中学1、2年のころ、農家の人たちと一緒に大喜びしたことがあります。当時「おいしい米は反収が少ない」が常識でした。供出の時代、作付けした大半は当時最も多収な「福

坊主」で、1反当たり6俵（10アール当たり360キロ）から6俵半くらい取れました。でも、自宅用のおいしい品種は4俵半どまりです。それが、「54号」という品種を植えたなら7俵から7俵半くらい取れ、味もずばぬけて良かったのです。「54号」の正体は、今の県古川農業試験場で育成された「東北54号」です。後に「ササシグレ」の名で登録され、東北一の大品種になりました。そういう体験がなかったら、品種改良の道に進むことはなかったと思います。

今も中学、高校の仲間と年に1回は集まっては、わいわいやっています。

ささき・たけひこ

1936年、旧田尻町（現大崎市）生まれ。東北大農学部卒。農林省（現農林水産省）入省。県農業試験場古川分場（現県古川農業試験場）に移り、品種改良に従事。寒さに強い品種研究用の「検定ほ場」を考案し、「ひとめぼれ（育成年91年）」、「まなむすめ（同97年）」などを世に出す。同試験場長、宮城経済連（現全農みやぎ）米穀部技術主管、NPO法人環境保全米ネットワーク副理事長などを歴任。



## 古高小史②

# 県内優勝もある野球部

古川高野球部の創設は1921（大正10）年。「甲子園」出場こそないものの、県内での優勝経験もある古豪だ。

県高校野球連盟の40年史「汗と土と涙と」（88年）や個人ブログ「古川高校野球部を甲子園へ」によると、51年に夏の宮城大会で優勝。当時は南東北3県から1校が甲子園の土を踏める時代で、東北大会で惜敗した。53年夏は県4強入りで東北大会に進出したが敗退。同年秋の県大会も優勝したが、やはり東北大会で敗れた。夏秋の投手、伊藤春男さん＝54年度卒＝は「毎日オリオンズ」、内野手の鈴木徹さん＝同＝は「大洋ホエールズ」へプロ入りし、鈴木さんは後に審判に転じた。

県代表決定戦でサヨナラ勝ちした71年夏は、福島県代表との決勝となり、甲子園で準優勝する磐城高に敗れた。「あと1勝」まで迫ったナインを「個性豊かな集団が一丸となって戦った」と野球部OB会長の沢口康久さん（61）＝74年度卒＝は振り返る。そして、古高野球部を「押しつけられて練習をやることは、全くなかった。校訓通りの自主自律です」と語る。



「甲子園」まであと一歩と迫った時代の古川高野球部員たち＝1972年卒業アルバムから（古川高提供）